

建築土木工学科

キーワード 建築論、都市論、都市計画、地域計画、地域再生、まちづくり



教授 / 博士 (工学)

下川 勇

Isamu Shimokawa

学歴

日本文理大学 工学部 建築学科、福井大学 大学院 社会システム学専攻 博士前期課程、福井大学 大学院 工学研究科 システム設計専攻 建築・都市システム講座 博士後期課程、京都大学 大学院 工学研究科 建築学専攻 研修員

経歴

株式会社 ゆう建築設計 京都本社設計部、福井工業大学 建築学科 非常勤講師、福井工業大学 講師/准教授/教授

相談・講演・共同研究に応じられるテーマ

まちづくり全般の相談/講演

メールアドレス

shimokawa@fukui-ut.ac.jp

主な研究と特徴

「地域特性の解読および具体的開発方法の研究」

都道府県市町の中心部であれ、農村部であれ、漁村部であれ、地域は歴史を紡ぎながら特有の「かたち」を形成してきた。地域を「つくる」ということは、その「かたち」を如何にとらえ、リデザインするかである。現在の地域は、まさしく、「かたち」が「つくれた」結果である。建築・都市の分野において「つくる」は、「開発」という仕方で見現化する。材料を使用して構造的に見現化するハード開発、人と何かを結ぶことでコミュニティを見現化するソフト開発が目下の課題となる。この課題はすべて地域に由来する。つまり、地域の解読こそが「かたち」が「つくる」の始まりであり、建築・都市の分野においては本領である。

本研究は、文献・調査によって地域特性の解読をおこない、実践的にリデザインする研究である。写真1は越前市若竹町で営まれる銭湯である。若竹町は、かつて北陸街道沿いに形成された打ち刃物の集落で、現在はその面影も薄れ、遊休不動産も目立つ寂しい居住地となっている。本研究では若竹町の歴史から地域特性を解読し、職人町として再生するべく、廃業していた銭湯を復活させ、まちづくりの動きを誘発するコミュニティ拠点とした。写真2は大野市南六呂師地区で行われている観光イベントである。本研究では高原という人為を遠ざけてきた環境から自然共生の理念を想起し、環境負荷を低減する仮装置（ハンモック）を利用した星空観望のイベントを開発した。写真3は南越前町瀬戸地区の集落観光の様子である。瀬戸地区は、かつては林業と農業を生業とした集落であったが、現在は過疎化の一途を辿っている。本研究では特有の生活文化と自然資源を調査し、そこに自然共生の方法を見出し、これを観光資源としてリデザインした。

また、本研究に関連して、現在（2020年）坂井市とともに東尋坊の再整備基本計画の作成に従事し、大正期に施行された史跡・名勝天然記念物の法制度の変遷を通じて、自然再生の方法と継承すべき自然共生の理念を見出し、これによる新たな東尋坊の「かたち」を定めた。これは、しばらく後にく「かたち」を現すことになるだろう。加えて、越前市の仮称南越前駅周辺再整備計画においても、中世期から現代にいたる地域特性として「農」の生活文化を抽出し、開発の際に新技術を応用した農業エリアとしてリデザインする方法を提言している。

上記のように本研究は、地域特性の解読を通じて具体的な開発方法におよび実践研究をおこなっている。



図1. 公衆浴場「城勝湯」（越前市若竹町）



図2. 「星空ハンモック」（大野市南六呂師）



図3. 瀬戸の集落観光（南越前町瀬戸）

今後の展望

地球規模の気候変動による災害、人口減少による地域再編、ライフスタイルや外的要因による生活様式の多様化といった、人々の生活に直接影響を及ぼす問題が顕在化し、対応が迫られる今日において、今一度、私たちが拠って立つ地域そのものを再評価する必要がある。本研究の特徴は、まさしく、計画の根拠とすべき「地域らしさ」を分析する点にある。

古代ギリシャに「ディアテシス」という言葉があった。これは「くふさわしさ」という適材適所を示す言葉で、建築であれ都市であれ、つくり手が意識すべき教訓である。都市部と農村部では景観が異なるが、これは「ディアテシス」の結果であるということが出来る。本研究で目指したいことは、都市部であれば都市部の、農村部であれば農村部の、その地域に「くふさわしいかたち」を解読し、この情報を行政や地域住民といったつくり手と共有することである。

所属学会

- 一般社団法人 日本建築学会 (平成9年～現在まで)
- 公益社団法人 日本都市計画学会 (平成29年～現在まで)
- JUD都市環境デザイン会議 (平成29年～現在まで)

主要論文・著書

- 『建築制作論の研究』建築論研究会編、所収「ヴィンチェンツォ・スカモツィの建築制作論」、中央公論美術出版（2016年 ISBN：978-4-8055-0757-5）
- 『建築論研究 02都市論への挑戦』建築論研究編集委員会、所収「建築論としての都市論の課題」（2020年 ISSN 2434-9755）